



花王社会起業塾 活動報告書

— 5周年を迎えて —



花王株式会社
〒103-8210 東京都中央区日本橋茅場町1-14-10
<http://www.kao.com/jp>



特定非営利活動法人ETIC.
〒150-0041 東京都渋谷区神南1-5-7 APPLE OHMIビル4階
<http://www.etic.or.jp>

2015年5月発行

「花王社会起業塾」5周年を迎えて

若手社会起業家支援を通じて、次世代を育む人づくりを

花王株式会社 執行役員
コーポレートコミュニケーション部門統括
石渡 明美



花王は、よきモノづくりを通じて、豊かな生活文化の実現に貢献することを企業の使命にしています。事業活動とともに、よき企業市民として社会に貢献することで、持続可能な社会を次世代に引き継ぎたいと考え、「次世代を育む環境づくりと人づくり」をテーマに社会貢献活動に取り組んでいます。

2010年、特定非営利活動法人ETIC.(エティック)様と連携して、社会課題をビジネスの手法で解決しようとする若手社会起業家を支援する、「花王社会起業塾」を開始しました。若手社会起業家の支援は、まさに「次世代を育む環境づくりと人づくり」という当社の社会貢献活動のめざすべき方向と合致しています。

また、開始と同時に、企業、行政、NPOが連携する、社会起業家支援プラットフォーム「社会起業塾イニシアティブ」に参画いたしました。多様なセクターが連携することは、ユニークで大きな可能性を持つ取り組みでもあります。

「花王社会起業塾」では、生活の身近な家庭品を扱う花王ならではの視点、「家族」をテーマに社会課題の解決をめざす若手社会起業家に着目しています。2014年までに、「子どもの貧困と格差」「ワーク・ライフ・バランス」「障害者の自立」「がん患者へのサポート」など、現代社会の抱えるさまざまな社会課題に果敢に挑む、15組の社会起業家の皆さんとご縁ができました。

「花王社会起業塾」の期間はわずか半年間で、花王ができることは限られていますが、この期間をステップにして、数年後、会社の経営者として大きく成長をしている姿を見えると、この活動の意義をあらためて実感いたします。また、社会起業家の皆さんの、社会課題の解決に向けてゼロから事業を立ち上げようとするエネルギッシュな姿勢は、社員にも大きな影響と気づ

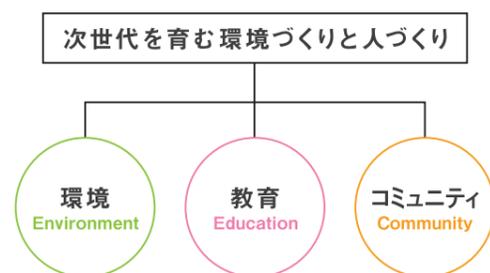
きを与えています。「支援する立場」「支援される立場」ではなく、両者がともに成長していく機会にもつながっています。

現代社会における多様で複雑な社会課題は、さまざまなセクターが連携して解決することが求められています。「花王社会起業塾」を卒業された社会起業家の皆さんが、いずれ社会課題解決に向けたよきパートナーとして、ともに活動できることを心より期待しております。

このたび5周年を迎え、「花王社会起業塾」の今までの活動を振り返り、ここにまとめました。ぜひご一読いただき、これからも本プログラムへの一層のご理解を賜りますよう、お願い申し上げます。

最後になりますが、5年間のプログラムの運営にあたりまして、ご支援ご協力いただきましたETIC.様をはじめ、ご関係企業の皆様、そして運営に関わってくださったすべての皆様に、心より感謝申し上げます。

＜花王グループ 社会貢献活動全体像＞



企業の皆様とともに進化し、新しい社会を創造する場に

特定非営利活動法人ETIC. 代表理事
宮城 治男



ETIC.(エティック)は2010年より、花王様と社会起業塾イニシアティブの取り組みをご一緒させていただき、今年で5年という節目の年を迎えることができました。ご参画へ意思決定をくださった経営陣の皆様をはじめ、日頃から若い社会起業家たちへの深い理解と愛情をもってご支援してくださっている社会貢献室のご担当者の皆様、ならびに社員の皆様の応援に深く感謝し御礼申し上げます。

花王様とは「家族を取り巻く課題」というテーマを立て、社会起業家たちとともに支援させていただいています。子育て、健康、福祉、女性の活躍など、この領域に挑む社会起業家たちは年々増加しています。一見些細なことの積み重ねにも見えるこのテーマが、今を生きる私たちの幸せとか生きがいを大きく左右しているといえます。5年間の「花王社会起業塾」で応援させていただいてきた、道なき道に挑む社会起業家の顔ぶれを振り返っても、この領域の挑戦者を支える取り組みを、花王の皆様とご一緒させていただいていることの意義の大きさをあらためて思います。

忘れられない場面があります。社会起業家たちと御社のミュージアムを訪れた時のことです。創業以来、よりよき生活文化の実現へと、志を貫き挑んでこられた歴史を拝見する、社会起業家たちの真剣な眼差しに私は感動を覚えました。恐らくそこに「社会起業家」の大先輩としての歴史を感じ、共感したのではないのでしょうか。一方で、5年間を振り返り、私のなかで

うしても印象に残っているのは、社員の皆様一人一人の、仕事に向き合われる真摯さです。あるいは人という存在への眼差しのやさしさといえよいでしょうか。創業以来、脈々と引き継がれてきた、志高き先人の方々のお姿と私にはとても重なって映ります。

私は実はそのような花王の社員の皆様が、今の時代によりよい仕事をしようと真剣に社会と、自分と向き合ったときに、自ずとビジネスそのものが社会起業家の仕事と近づくのではないかと考えています。そしてまたそうした進化をしていける企業でなければ、志ある社員の心を引き付け続けることはできない時代となっていくようにも思います。

社会起業塾は、単に社会起業家たちを支援するというだけでなく、参画いただいている企業様とともに進化できる場でありたいと考えています。課題解決に取り組む、道なき道を拓いて新しい価値の実現に挑む社会起業家たちと触れたいだいたり、時に伴走いただいたり、ともに挑んでいただくようなご縁を多くつくっていきたくと考えています。

これからの新しい5年、新しい社会を、企業の在り方を、ともに創り出していくチャレンジをご一緒させていただくことを、楽しみにいたしております。

プロフィール

1972年徳島県生まれ。93年、早稲田大学在学中に、学生起業家の全国ネットワーク「ETIC.学生アントレプレナー連絡会議」を創設。2000年にNPO法人化、代表理事に就任。01年ETIC.ソーシャルベンチャーセンターを設立し、社会起業家育成のための支援をスタート。02年より日本初のソーシャルベンチャー向けビジネスプランコンテスト「STYLE」を開催するなど、社会起業家の育成、輩出にも取り組む。04年からは、地域における人材育成支援のチャレンジ・コミュニティ・プロジェクトを開始、50地域に展開を広げる。11年、世界経済フォーラム「ヤング・グローバル・リーダー」に選出。

社会課題をビジネスの手法で解決しようとする若手社会起業家を支援する 「花王社会起業塾」プログラムの紹介



社会課題の解決を志す若者を、原石から発掘して徹底的に磨き上げる

花王では、特定非営利活動法人ETIC.(エティック)と協働し、2010年より社会課題をビジネスの手法で解決しようとする若手社会起業家の育成を支援する「花王社会起業塾」を実施しています。「花王社会起業塾」では特に、「家族」を取り巻く社会的な課題の解決に挑む若手社会起業家を発掘し、成長を支援しています。

プログラムは2つに分かれています。2010年から開始した「スタートアップ部門」では、事業を始めて間もないスタートアップ期の社会起業家に対して、事業の基盤づくりを後押しします。

また、2012年からは、過去に「スタートアップ部門」で支援した社会起業家の中から公募し、事業のさらなる飛躍をめざす社会起業家に対して、右腕となる人材を派遣し、事業の新規展開や加速を促す「イノベーション部門」を創設しました。これによって、社会起業家を継続発展的に支援する仕組みを整え、現在までに15組の社会起業家を輩出しています。

「花王社会起業塾」の卒塾生は、さまざまな分野・地域で、よりよい社会をつくるためのイノベーションを仕掛け、社会にインパクトを生み出し続けています。

事業の成長を加速させるプログラム内容(スタートアップ部門)

単なる「学び」の場にとどまらず、参加メンバーが事業を推進しながら、先輩社会起業家とともに、重要な経営課題に取り組んでいく実践の場。事業を進展させ成長軌道にのせるため、ブレないミッションと、課題の本質に向き合う粘り強さを備えた社会起業家を育成しています。

社会を変える事業戦略を
集中して磨き上げる



先輩経営者を交えた経営戦略会議
(バーチャル・ボード・ミーティング)

社会課題の解決に
徹底的に向き合う研修



2か月に1度の合同研修合宿での
シニアメンターによるアドバイス

継続的に学び合う
起業家コミュニティ



起業塾生による相互メンタリング



コーディネーターによる定期的なコーチング



実践に向けた事業計画の作成



卒塾生同士の連携の機会

花王社会起業塾

立ち上げ支援(6か月)

加速・発展支援(6か月)

スタートアップ部門〈2010年より15組を支援〉

対象:これから事業を始める、または起業して間もない若手社会起業家。課題の本質をつかみ、解決に向けた社会事業の“軸”をつくるための支援を実施。



イノベーション部門〈2012年より4組を支援〉

対象:スタートアップ部門を修了し、すでに事業の実績をつくっている社会起業家。さらなる事業の飛躍に向けて、起業家のもとに、右腕となる人材を派遣することにより、事業の加速を支援。



特定非営利活動法人ETIC
について

1993年、学生起業家支援の全国ネットワークとして活動を開始。以来、若い世代が自ら社会に働きかけ、仕事を生み出していく起業家型リーダーの育成に取り組み、年間約500名の20代の若者にプログラムを提供し、これまでに400名を超える起業家を輩出している。また2011年に発生した東日本大震災以降は、震災復興支援にも注力し、「右腕プログラム」では、東北全域90以上のプロジェクトのリーダーのもとに200名を超えるスタッフを送り込み、コミュニティ再生、産業復興等の支援を行っている。

起業塾生と社員とのさまざまな接点の機会

社会起業家が取り組む社会課題を理解し、より身近に感じてもらうために、これまで起業塾生と社員とのさまざまな接点の機会を提供しています。社内にも起業家精神を吹きこみ、自らを振り返り、よい気づきの場となっています。



業務に関連した社会起業家の経営戦略会議への参加



社内での活動報告会やダイアログ(意見交換会)の実施、活動の現場訪問など



卒業生紹介

仕事と子育ての両立を「自分にもできる」選択へ

2010年度スタートアップ部門(2012,2013年度イノベーション部門) 修了

スリール株式会社 代表取締役社長
堀江 敦子さん

プロフィール

日本女子大学人間社会学部社会福祉学科卒業。大手IT企業勤務を経て2010年に25歳でスリールを起業。最年少で「ワーク・ライフ・バランス コンサルタント」を取得。「若者のキャリア意識の変革」を得意とし、多数の講演実績を持ち、新宿区の男女共同参画推進委員も務める。2013年「日経WOMAN」誌で「次世代ガール25人」に、14年「AERA」誌で「日本を突破する100人」に選出される。



◆「ワーク&ライフ・インターン」で学生が共働き家庭のリアルを体験



学生が「仕事と子育ての両立」を具体的に体験



4か月間を1クールとして、40名の学生にインターンを提供

昨今、社会では女性活用が叫ばれ、多くの企業で育休制度拡充などの取り組みが行われています。しかし、継続就業を希望している場合でも、出産によって6割の女性が離職するという現実が変わっていません。

離職の具体的な理由は、「深夜残業などの働き方はできない」「子育てサポートが得られない」といった制度面の課題もありながら、「子どもを預ける罪悪感」や「先が見えない不安」といった意識面の課題も挙げられます。

一方、将来を担う大学生に「身近に仕事と子育てを両立している人がいるか」という質問をしたところ、約80%の学生が「いない」と答えています。

スリールはこの「『仕事と子育ての両立』について知る／体験する機会の不足」が、共働き家庭への漠然としたネガティブイメージを生み、ひいては女性の労働力率と出生率が上がらない1つの大きな原因となっているのではないかと考えました。

そこで就業選択前の大学生が「仕事と子育ての両立」をリアルに体験して学ぶことができる、家庭内インターンシッププログラム「ワーク&ライフ・インターン」を提供しています。

◆花王社会起業塾の6か月間で社会を変える仕組みを構築

社会起業塾で学んだのは、「社会を変える“仕組み”の在り方を考える」ということでした。

現在、スリールが提供する「ワーク&ライフ・インターン」は、体験することを通じて、学生の「仕事と子育ての両立への意識」を前向きに変えるキャリア教育です。しかし、社会起業塾に参加した当初は、特に教育的なプログラムではなく、学生をベビーシッターとして派遣するだけの仕組みでした。社会起業塾の6か月間で、現在実施している「4か月間の子育て体験」と「企業でのキャリア勉強会」を組み合わせた、独自の教育プログラムが完成しました。

創業から4年経った2014年12月には、経済産業省主催の「第5回 キャリア教育アワード」で優秀賞を受賞しました。花王社会起業塾は私にとって「社会を変える仕組み」をつくる原点となった、なくてはならない機会でした。

児童福祉施設の子どもたちに学習支援サービスを提供

2011年度スタートアップ部門(2012年度イノベーション部門) 修了

特定非営利活動法人3keys 代表理事
森山 誉恵さん

プロフィール

1987年東京都生まれ。慶応義塾大学法学部政治学科卒。大学時代、児童養護施設で学習ボランティアを始める。在学中の2009年4月、学生団体3keysを設立し、翌年、内閣府・地域社会雇用創造事業交付金事業に採択される。2011年5月にNPO法人化し、代表理事に就任。同年、「社会貢献者表彰」を受賞。



◆学習ボランティアを派遣し、児童福祉施設の子どもをサポート



児童福祉施設での学習指導



子どもの貧困や格差の現状を伝えるセミナーを開催

3keysは、虐待や育児放棄などにより親元で暮らせない子どもたちを公的に保護し、育てる児童福祉施設を対象に、学習支援サービスを提供しています。

全国の児童虐待や育児放棄等の発見・相談件数は、年間7万件を超えています。虐待の背景には、親自身の社会的孤立や貧困が存在しており、子どもたちは虐待や育児放棄の状態から長い間発見されないことも少なくありません。児童福祉施設では、虐待による心のケア、安心・安全に暮らせる場所の提供などを行っていますが、実は児童福祉施設が最も必要としている支援の一つが、学習支援です。

生まれ育った家庭環境が、落ち着いて学習できる環境ではないなどの理由で、学習が遅れ、長い間不登校になっていた子どもも少なくありません。そのうえ児童福祉施設にも学習をサポートする体制はなく、慢性的な人手不足の中で、職員の皆さんが仕事の隙間を縫って子どもの学習を見ているのが現状です。

そういった学習支援のニーズを広く伝え、学習ボランティアを研修・派遣することで、子どもたちの学習環境の改善、目標実現や自立のサポートをしていくことが、私たちの事業の目的です。

これまで東京、神奈川、千葉の約20施設に学習支援を提供してきました。学習塾や企業等とも連携し、より多くの子どもたちに支援を届けられることをめざしています。

◆事業の目的を考え抜き、多くの仲間や応援者と出会えた

社会起業塾の半年間は、この事業に取り組む目的を徹底的に考えさせられた期間でした。社会起業塾で「何のためにこの事業をやるのか」を考え尽くしたからこそ、今があるように思います。

また、社会起業塾を通じてたくさんの起業家仲間や応援者と出会うことができました。大学卒業後、企業で働いた経験もないまま、思い一つで事業を始めたため、今でも、できることよりできないことや壁にぶつかることの方が多くあります。そんなとき一緒に頑張っている仲間や、何かあったときに相談ができる相手がいることは、くじけずに事業を続ける支えになっています。

所得格差が教育格差を生まない社会をめざして

2013年度スタートアップ部門修了

公益社団法人チャンス・フォー・チルドレン 代表理事
今井 悠介さん

プロフィール

1986年神戸市生まれ。小学2年生のときに阪神・淡路大震災を経験。大学在学中にチャンス・フォー・チルドレンの設立母体であるNPO法人プレーン・ヒューマニティーで不登校の子どもの支援に従事。卒業後、株式会社公文教育研究会(KUMON)に入社。東日本大震災を契機に、大学時代の仲間とともに2011年チャンス・フォー・チルドレンを設立、代表理事に就任。



◆ 教育バウチャーの提供で貧困家庭の子どもたちを支援



子どもたちに提供する教育バウチャー(クーポン券)



バウチャーを利用して学習に取り組む子ども

日本の子どもの貧困率は16.3%——。子どもたちは、生まれながらの家庭環境、親の病気や死別、突然の災害など、自分ではどうすることもできない事情によって貧困状態に陥っています。貧困家庭で育つ子どもたちは、十分な教育の機会を得ることができず、低学力、低学歴、不安定な就業に陥り、貧困が次世代に連鎖しています。

特に、日本では学校教育の機会が平等に保障されている一方で、塾や習い事などの学校外教育の機会は、家庭の所得によって大きく左右されてしまいます。つまり、日本の子どもの教育格差は「放課後」に生まれています。

チャンス・フォー・チルドレンは、所得格差によって生まれる教育格差を是正し、貧困の連鎖を断ち切るために、貧困家庭の子どもたちに対して塾や習い事などで利用できる教育バウチャーを提供しています。現金給付と違い、バウチャーの使途は教育サービスに限定できるため、確実に教育の機会を保障することができます。

また、単にバウチャーを給付するだけでなく、大学生のボランティアが子どもと定期的に電話や面談を行い、進路・学習の相談に応じたり、バウチャー利用に関するアドバイスをしたりすることで、バウチャーの有効活用を促進しています。

◆ 理想の社会を実現するため、ぶれない「軸」をつくった場所

社会起業塾参加前は、どこか「手段」にこだわっていた自分がありました。でも、「自分たちは、誰の、どんな課題に向き合うのか?」ということ突き詰める中で、「手段」ではなく「成果」にこだわる姿勢が身についたことが、自分自身の大きな変化だと思います。

そして、自分たちが支援を届けなければいけない子どもたちを明確にし、理想の社会を実現するためのシナリオとビジョンを描くことができました。

今考えると、社会起業塾は、絶対にぶれない「軸」をつくるための場所だったと思います。想いを持った仲間たちと、たくさん悩んで、課題と向き合い続けたあの時間があってこそ、今私たちは、迷いなく前に進むことができます。

笑顔と太陽の畑「ごきげんファーム」で地域に貢献

2014年度スタートアップ部門修了

認定特定非営利活動法人つくばアグリチャレンジ
副代表理事・農場長
伊藤 文弥さん

プロフィール

1988年生まれ。筑波大学在学中より議員インターンシップを行い、農業や障害者雇用の問題を知る。農業法人みずほにて研修を受講。同時に障害者自立支援施設に勤務。2010年つくばアグリチャレンジ設立、翌年「ごきげんファーム」を代表理事の五十嵐氏とともに開始。12年日本青年会議所主催の「人間力大賞」グランプリ受賞、13年世界青年会議所主催「世界の傑出した若者10人」に選出。



◆ 障がいがある人たちもその家族も、心から笑顔になれる地域づくりをめざして



農場のスタッフ。みんなの笑顔が自慢



その日に採った新鮮な野菜を届けている

私たちは障がいのある人たちの働く場所が不足しているという社会課題を解決するために事業を行っています。同時に農業では担い手不足が問題となっています。

農園「ごきげんファーム」では、働く場のない障がいのある人たちが、使われなくなった農地を活用して地域の農業を担っています。就労支援のサービスを活用しながら、みんなで農業に取り組み、高品質の野菜を販売することで自信を身につけ、就職に繋がってきました。数名の障がいのあるスタッフを雇用し、周囲の就労支援施設と比べて支払う工賃も、就職に結びつける実績も高く、このモデルを日本中に広げていきたいと考えていました。

しかし、社会起業塾のプログラム中に、それは大きく変わりました。「はたらく」ということは確かに重要ですが、それ以上にみんなが不安を感じているのは、周囲との人間関係や、将来暮らす場所であることを、多くの人の声を聞くことで知ることができました。

それらの声に応えるために、「はたらく」だけではなく、「あそぶ」「くらす」を事業の柱に加えることを決めました。障がいのある人もその家族も、心から笑顔になれる地域をつくっていききたいと思っています。

◆ 自分たちがつくりたい社会と組織の方向性を明確にできた

社会起業塾の半年間での成果は、私たちの4年間の活動の中でも最も大きいものでした。野菜の安定した売り先を初めてつくれることができ、その過程でたくさんの課題が出てきたのですが、それを改善するための会議体もできました。

また、野菜を売る中で問われ続けていた「お前がつくらなければいけない社会はどんな社会なのか?」という問いにも、多くの先輩から学び、社員とともに考えることができ、2020年に向けた仮説をつくることができました。

僕たちの規模からすれば数字も劇的に伸びましたが、それ以上に組織が同じ方向を向いて歩き出すことができたことに、大きな手応えを感じています。花王社会起業塾に関わる皆様に感謝をお伝えしたいです。

花王社会起業塾生とその事業内容一覧

〈スタートアップ部門参加〉

2010年度

◆ **三田果菜さん (Happy Beauty Project 代表)**
副作用で変化したがん患者さんの外見を美容 (ウイッグ、メイクなど) で支え、患者さんの"生きる"を支援。

◆ **左: 中村明澄さん ◆ 右: 堤円香さん (特定非営利活動法人キャトル・リーフ 理事長)**
就業しながら家族を介護している介護者への支援サービス (現在は株式会社ウイントリアで事業を継続)。

◆ **堀江敦子さん (スリール株式会社 代表取締役社長) ※2012・2013年度イノベーション部門参加**
「キャリアを諦めず、仕事と子育てを両立する人」を育てる「ワーク&ライフ・インターンプログラム」を実施。

2011年度

◆ **堀江由香里さん (特定非営利活動法人 ArrowArrow 代表理事) ※2013年度イノベーション部門参加**
妊娠・出産を迎えても活躍できる働き方を実現できるよう、中小企業向けに組織と人をサポート。

◆ **三木智有さん (特定非営利活動法人 tadaima! 代表理事)**
女性だけに偏りがちな家事労働を、家族で助け合えるための空間コンサルティング。

◆ **森山蒼恵さん (特定非営利活動法人 3keys 代表理事) ※2012年度イノベーション部門参加**
児童福祉施設の子どもたちへの学習ボランティアの研修・派遣で、教育格差や社会的孤立の解消をめざす。

2012年度

◆ **左: 今井紀明さん ◆ 右: 朴基浩さん (特定非営利活動法人 D×P (ディーピー) 共同代表)**
通信制高校生の2人に1人が進学も就職もせず卒業するという課題解決のため、キャリア教育プログラムを提供。

◆ **染矢明日香さん (特定非営利活動法人 ビルコン 理事長) ※2014年度イノベーション部門参加**
中高生や若者、保護者向けに性の健康とライフプランニングに関する啓発活動を実施。

◆ **渡辺大地さん (株式会社 アイナロハ 代表取締役)**
産前産後 (産後6か月まで) の家庭に家事育児サポートスタッフを派遣し、育児を始めるお手伝いを実施。

2013年度

◆ **今井悠介さん (公益社団法人 チャンス・フォー・チルドレン 代表理事)**
貧困家庭の子どもたちに、塾や習い事で利用できる教育バウチャーを提供し、教育格差の是正をめざす。

◆ **岩田拓真さん (株式会社 a.school (エイスクール) 代表取締役・校長)**
知識習得だけでなく、学ぶ動機や目的を発見し、自分に合った学び方をデザインする力を身につける学習塾を運営。

◆ **杉山絢子さん (一般社団法人 CAN net 代表理事)**
病気経験や職業スキルを活かせる場づくりにより、病気になっても自分らしく生きられる社会をめざす。

2014年度

◆ **伊藤文弥さん (認定特定非営利活動法人 つくばアグリチャレンジ 副代表理事・農場長)**
障がいがある人と農業に取り組み、地域の農業を担い、貢献することで暮らしやすい地域をつくる。

◆ **永田京子さん (ちえぶら 代表)**
体のケア (エクササイズ) と女性ホルモン・更年期の事前知識を伝えるプログラムを提供。

◆ **羽根田里志さん (FindSitter 代表)**
共働きやひとり親の子育て家庭へ、自宅保育のシッターとシングルマザーシェアハウスを提供。

花王へのメッセージ

これからも「豊かな生活文化の実現」のために挑むチャレンジャーとともに



IIHOE [人と組織と地球のための国際研究所]
代表者 兼 ソシオ・マネジメント 編集発行人
川北 秀人さん

はじめに、「社会起業塾イニシアティブ」に続けてご参加・ご協力いただいていることに、心からお礼申し上げますとともに、このたび、花王社会起業塾が5周年を迎えるにあたり、その意義や可能性について、改めてお伝えしたいと思います。

貴社が使命に掲げる「豊かな生活文化の実現」のために、ビジョンに掲げられた「消費者・顧客を最もよく知る企業に」なるため、研究開発が欠かせないの言うまでもありません。その研究開発は、新たな素材を開発するだけでなく、消費者や顧客のくらしや、それらを取り巻く社会や環境が今後どのように変化・推移するかを理解し、それに備えることも含まれます。

今、貴社に応援していただいている社会起業家の卵たちは、今日の社会において少数ですが深刻な、しかし、よりよい社会づくりにおいて不可避な課題に挑むチャレンジャーたちです。ひとつひとつのチャレンジは、まだまだ小さく、か細いものに過ぎませんが、現時点では貴社からご支援をいただければ幸いです。しかし、逆に、彼ら・彼女たちから学んでいただきたいのは、社会に挑む姿勢や切り口です。

先進国の生活環境が成熟する一方、途上国では加速度的に改善が進む中、化学系のモノづくり企業にとって、先述の通り、消費者や顧客のくらしや、それらを取り巻く社会や環境が今後どのように変化・推移するかを理解し、それに備えることは、これまで以上に重要になります。

プロフィール

株式会社リクルートを退職後、国際青年交流NGO代表や国会議員の政策担当秘書などを務め、94年にIIHOE設立。95年、阪神・淡路大震災時の被災地の混乱の中で、自身の背景から行政・企業・民間の情報の橋渡しを担う中、市民活動の重要性、支援の希薄さを痛感し、本格的に直接個別支援を開始。環境問題・社会的課題の解決に向けて「2020年の地球への行動計画立案」の提言に取り組みながら、現在も市民団体(NPO)や社会責任(CSR)志向の企業など、年間100団体以上にもおよぶマネジメント支援を続けている。社会起業塾の立ち上げから、プログラムのサポートをはじめとして、起業塾生のシニアメンターとして、成長を支援している。

つまり、「社会起業塾イニシアティブ」にご参加・ご協力いただくことは、貴社にとって「利益を社会に還元する」という、従来型の社会貢献活動の枠組みを超えて、自社と社会がともによりよい未来を実現できるよう、新たな製品やサービスを、これまでにない手法やアプローチでもたらすことができないかを模索するための、研究開発であり、人材育成であり、事業戦略を検証する機会でもあります。

その価値と可能性に気づいている欧米の企業は、社会事業家を「支援先」ではなく「パートナー」と位置づけ、素材研究や製品デザイン、マーケティングや営業など、全社のあらゆる分野の最も優秀な若手従業員を数か月間派遣しています。

社会や世界は、これまでの延長線上にはありません。だからこそ、これまでにない発想やアプローチが実現できる人材と組織を育てることができるかが、企業の持続可能性を左右します。その意義と可能性に5年前にお気づきくださったことに、改めて敬意を表するとともに、これからも、若いチャレンジャーたちとともに、時に彼ら・彼女たちから貪欲に学びながら、「豊かな生活文化の実現」のために挑み続けていただきたいと思います。